

2021（令和3）年度 東京大学 入試問題 第4問（文系） 解答例

- * 漱石と子規との関係性に関しては、漱石の一般的な知名度、子規の脊椎カリエスと「糸瓜咲いて痰の詰まりし仏かな」を筆頭とする絶筆三句の知名度、漱石と子規との友情譚などから、思い入れたっぷりに語られるケースが少なからずあると思われる。非常に誤読を誘発しやすい素材文であり、その点で興味深い。
- * 「子規＝病苦（死病）＝悲痛・哀れ」という、子規に関する通俗的な固定観念による月並みな「読み」に関しては、所謂鶏頭論争における評論家山本健吉の批判などが知られている。抒情とセンチメンタリズムは区別したいものであるが、所与の文章を客観的に読み、それに則って論理的に解く姿勢だけは、さすがに放棄してはならないだろう。
- * 自身の病苦や臨終をすら「写生」する態度を貫く剛毅な子規と、「写生」の理念を学び、「非人情」を説いた漱石との友情であってみれば、ありがちな哀れを誘う泣き言などは一言も書かないからこそその子規らしさであり漱石らしさであるとも言う。漱石の言葉を記しておく。「同情はあるけれども駄菓子を落した小供と共に大声を揚げて泣くような同情は持たぬのである」（夏目漱石「写生文」による）
- * 東大の出題者が、わざわざ設問一・四のみ「心情について説明せよ」と問うていることを考えてみるとよい。素材文のポイントは「拙」の一点にあり、同じ想像を逞しくするなら、「もっとも「拙」の欠乏した男」が、「わざわざ余のために描いた一輪の東菊の中に、確かにこの一拙字を認めることができた」ことについて、であろう。

一 絵の拙劣さは病気のせいだと負け惜しみの冗談を装い、寝たきりの病状と漱石への友情を感傷に陥らず伝えたいという心情。

- * 子規が病苦の悲痛さや漱石への思慕を訴えているといった恣意的な想像で解答としてはならない。病がつらく、漱石に会いたいというのは当然であろうが、ここには「俺の絵は下手じゃない、そう見えるのは病気のせいだ」と、「拙」を自覚しながら負けず嫌いに強がっている自分、という滑稽さを敢えて見せる諧謔味がある。むしろ遠方の友人に心配をかけまいとする気丈な心配りがあるだろう。

二 極めて簡単な図柄で、用いた色は三色のみ、花と蕾は三つ、葉は九枚で、周囲は白く表装は寒色と、全体に殺風景な印象であるから。

- * これについても、前問と同様に、「子規は貧弱な画しか描けないほど弱って可哀そうだ」などという憐憫を「淋しい」と弱弱しく吐露しているのではない。漱石の心が淋しいの

ではない。「壁にかけて眺めて見ると」「どう眺めても」という、あくまでも視覚的、構図的な問題なのであり、作品に対する批評を友情で歪めたりはしていない。

*そもそもなぜ漱石は色数、花や葉の数を数えているのか。ここでいう「淋しい感じ」とは「懷具合が淋しい」などに近い物足らなさ、乏しさの意である。そうでなければ後段の「ただ画がいかにも淋しい。できうるならば、子規にこの拙な所をもう少し雄大に發揮させて、淋しさの償いとしたかった。」という、「淋しい←→雄大」の対義関係が説明できまい。せつかくの「拙」なのに（それには「多大の興味」があるのに）、残念ながら「淋しい」ので、もっと「雄大に」描かせたかった、と書かれている。問四で問われているのは、子規が病でなく、存命であれば、同じ「拙」な絵をもっと賑やかに描けただろうに、という心情である。

三 才能の赴くままに写生の詩歌を作る子規が、写生画は拙く、時間と労力を要したと思うと、その矛盾がどうしても好ましいから。

*「～禁じ得ない」理由として、解答表現には「どうしても～してしまうから」というニュアンスを出したいところ。万能な存在にも僅かに欠点があれば、そこは人間らしくて面白いであろう。本当の問題は、その欠点を子規が敢えて親友に晒した真情にあらう。

四 万事に無欠な子規が、画は拙く、愚直な旨さを表した点は興味深い、より雄大な画を描けるまで生きてほしかったという心情。

*ここに至って、子規の死を惜しむという本音の心情部分が、ようやく姿を表している。センチメンタルな文章ではないからこそ、筆者の心情も深いところで伝わるのである。

